

第47回 日本癌治療学会学術集会での示説(PS86-07)

20091024 日(土)

パシフィコ横浜 展示ホール

右乳腺浸潤性小葉癌（印環細胞癌）の四年間の自然経過

牧りハビリテーション病院 自由診療外来

1941年3月7日生まれの女性。2005年6月13日他院にて右乳房C領域に直径2cm大の腫瘍を認め針生検の結果浸潤性小葉癌の診断。同7月に手術予定であったが手術を拒否され2005年7月8日当院初診。初診時に遠隔転移や腋窩リンパ節転移を認めず。抗癌剤やホルモン剤、放射線療法も拒否されたため当院にて嚴重に経過観察を行った。評価はMRIによる腫瘍の大きさをみた。現在まで四年間、腫瘍はやや増大したものの遠隔転移や腋窩リンパ節転移を認めず患者様のADLは全く損なわれていない。その間食事指導や早寝早起を勧めた。また因果関係は不明であるが福田式刺絡、高濃度炭酸泉による温熱療法（炭酸濃度1200ppm以上）を施行した。現在は三ヶ月に一回診察のみで腫瘍と腋窩リンパ節転移の触診と、半年から一年に一回はMRIでの腫瘍の大きさや転移の有無の検査を行っている。四年間の経過中のインターロイキン12活性やリンパ球数を示して腫瘍の進行が緩やかな原因と細胞性免疫の活性化との関与を述べる。